

バイリンガル形式の英語教育を考える

—4 技能を駆使した指導法を探って—

Contemplating Bilingual English Education-Exploring the four key skills; reading, writing, listening and speaking

小島 由美 Yumi KOJIMA

概要

学校現場で展開される英語学習に焦点を当て、授業内で学習した英語の4技能が、授業外の課外活動でどのような発展学習につながっているかまとめてみた。「生きた」ことばは、人が日常生活の中で使うことによって洗練される。世界に発信する若い世代の育成に向けて、世界補助語の位置付けである「英語」学習のあり方を考えてみた。

キーワード

バイリンガル形式

異文化発展学習

留学生

英語学習

翻訳作業

思考のプロセス

実践的コミュニケーション能力

目次

- 1 はじめに
- 2 岡崎城西高校 英語表現 I listening / speaking / writing
- 3 台湾 私立高校、国立高校の英語教育 listening / speaking / writing
- 4 カピラノ大学留学生の英語部生徒への英語レッスン listening / speaking
- 5 おわりに 英語部「おもいでぐさ」の翻訳活動を始めて writing / reading

1 はじめに

カナダのモントリオールに住む私の友人に、お孫さん四名の現地の学校教育で受ける言葉の学習について尋ねてみた。フランス語と英語が公用語になっているカナダの学校で、フランス語の教育を受けることはどのようなものなのか知りたかったのだ。私の友人スーザン・スコットさんは、以下のようなコメントを送ってきた。

Learning French in Quebec, the best way to learn

is to come and live with a French family. I don't have any information but I am sure it is available. Keep in mind that the French in Quebec is different than the French in France, especially in Montreal. The accent etc. is quite different. Even the French have trouble understanding them at first. If someone wants to learn international French, I wouldn't recommend staying with a Quebec family, even though they

probably would have a WONDERFUL time! My grandson Matthew (8 years old) who speaks French fluently-it's his first language- his difficulty at school because he speaks French French since his mother is Belgian French and the other children all speak Quebecois. He has no trouble understanding but he is considered "different" because he doesn't speak Quebecois. "Quebecois" is French for a Quebecker or an adjective describing something to do with Quebec. The feminine is "Quebecoise "-ie. a woman from Quebec.

今年の7月16日（土）に開催された愛知サマナーセミナーの当校英語部の講座で、カナダのカピラノ大学から来た留学生のプレゼンテーションでも、ケベック州では英語よりもフランス語がよく使われていると伺い、スーザンからのコメントはとても興味深いものに思えた。

ケベック州で話されるフランス語は「ケベックなまりのフランス語」で、スーザンのお孫さんたちはベルギー系フランス人の母親の発音やアクセントを毎日の生活の中で身に付けていて、Quebec Frenchではなく French French（フランスで話されているフランス語）を話すことが通常であるということなのだ。

この話を踏まえると、スーザンのお孫さんたちは日本でいう「フランス語を話す帰国子女」のような位置づけだと考えた。教室の中の彼らは「フランス語を話す」部分では他の子供たちと「違う」と見なされているが、ケベックなまりのフランス語を話すクラスメイトの会話も理解している。

二か国語を話すカナダの中でもケベック州の事情を知り、外国語として英語を学ぶ国の子供たちが、その国のアクセントやなまりを含めて英語を使うことは決して否定的に考える必要はないととらえた。むしろ、外国語である英語学習に挑戦する姿勢を励ます学校教育はとても異議深いと感じる。つまり、We think it is okay for us to speak English with our accent as long as we can be understood.なのである。この事実を踏まえて、日本、台湾での英語教育を4技能の観点から触れてみたい。

2 岡崎城西高校 英語表現 I listening / speaking / writing

岡崎城西高校の英語表現 I (English Expression I)の授業は、英語圏から来ている外国人教師と、教員免許状を持った日本人教師のペアティーチング形式である。なぜ英語と日本語を話す教師のペアティーチングによる「バイリンガル形式」なのか。ここは様々な意見が飛び交うところだと思う。

文部科学省から「英語を使った英語の授業」が提案されて間もない。英語教師による英語だけの授業を生徒たちが理解したらとても理想的だと思う。ただここで敢えて冷静に考えてみたい。日本語で自分の意見を組み立てて発表する訓練を十分に受けていない生徒たちが、英語だけの授業を消化することにはいささか疑問である。私見では、外国語である英語の授業を受けながら母国語の「日本語」で不明点を確認できるメリットがペアティーチングの中にあると考える。また「英語だけで理解しなければならぬ」という生徒たちのプレッシャーを緩和することもできる。

今年の一学年は、一クラス約38名で15クラスあり、生徒たちの学習到達度に応じてX/Y/Zコースの三つの段階にクラス編成されていて、約550名の高校生たちが「生の英語」を聞く機会に恵まれている。各クラス週二時間のレッスンが設定されているので、日本人教師によるコミュニケーション英語 I の週四時間のレッスンと合わせると、合計週六時間も英語を学習していることになる。

昨年度までは外国人教師たちの手作り補助教材を印刷してクリアファイルに保管させ、ポートフォリオ形式の学習を進めていた。しかしながらR先生の提案でこの教材を印刷会社で製本し、プリントを印刷および配布する時間の削減と生徒たちの予習や復習にも役立つ仕組みを取り入れ、生徒一人に一冊補助教材を持たせる形で授業が始まった。

R先生の予想は当たっていた。予想以上に生徒たちばかりでなく、教師たちも授業内容そのものに意識を集中できるのである。時間の節約や資材の節約等は、私たちの想像以上に授業内容を効果的なものに上げていく。一回の授業は50分しかない。その限られた時間の中で最大限の効果を上げて授業をするための一つの方法が今年初めて実施された。

さて、英語表現 I の授業はひたすら「アウトプット」重視型の授業である。英語での会話を聞いてその内容に答えるものや、英検二次面接試験対策の授業では実際に verbal check という二次面接試験の模擬試験が実施される。また show and tell のプ

レゼンテーション試験では、生徒たちが大切にしているアイテムを見せながらその理由を説明するのであるが、スピーチをする前段階として「writing」で発表内容を書いて準備し、それを口頭で練習してから発表するのである。つまり定期考査のような筆記試験だけで評価して成績を付けない。普段の授業の中で積極的に英語を使ってコミュニケーションを図る姿勢がとても重要視されている。バランスよく西洋の教育内容が取り入れられていて、入試にも対応可能な「実践的コミュニケーション能力」を身に付けることが目標になっているのだ。

英語表現 I の授業内容は、listening, speaking と writing の integrated lesson になるが、いささか reading の訓練には欠ける。その点コミュニケーション英語 I とのリンケージを効果的に図ることによって、4 技能を補い合い外国語が発達していくのである。現実的には、英語表現 I の授業の中で文法事項を詳細に説明することは技術的にも時間的にも難しい。何故ならば、現時点では生徒たちは英語による説明を理解することが容易ではないからだ。それでも私自身はそんなに悲観的ではない。むしろ高校時代に「生の英語」に触れる体験は将来的に必ず生きてくると確信している。言葉の発達はその技術を磨く前にその言葉が話されている社会文化を知ることにより醸し出されると期待しているからだ。

例を挙げると、両親の仕事の都合で海外生活することを余儀なくされた子供たちは異文化に住む体験を通してその文化の生活習慣を知り、それを身に付けることが言葉の発達を助けることがよくあると思う。その言葉はたとえ教科書から学んだものでも、学校を離れた実際の生活の中で「生きた言葉」として活用しているうちに身に付くことが多いので、比較的容易に外国語で話をすることができるようになる。

英語表現 I の授業アンケートの結果は、生徒たちの満足度が高いという点でもとても良い。外国語を学ぶ場合、生徒たちの「学ぶ意欲」が学習内容の発達を促すことが多いからだ。時々日本語の説明を受けながら英語の学習に役立てる「二か国語学習法＝バイリンガル形式」方法は、二つの言語のコードをスイッチングすることによって、日本語で説明されている概念を英語に置き換える思考過程が加わる。この「考える」というプロセスがとても大切な役割を果たしている。インプットされた思考が整理されると、発表したい内容も順序立てて組み立てられて、

外国語でアウトプットするときに聞き手にとっても明確な内容に転換されるからだ。

また授業は生徒たちにとって安心して受けることができる環境を整えることが優先される。この点からも、英語を使うための前提として母国語である日本語で教師たちに質問できる余地があることは大きなメリットであると期待したい。

ここで英語表現 I を担当している教師チームの取り組みについて触れてみたい。二名の外国人教師たちに対して五名の日本人教師が各クラスを分担して担当している。英語教育全般で生徒たちに 4 技能をバランスよく習得させることを目標とすれば、コミュニケーション英語 I と英語表現 I で同じクラスを担当している教師同士で情報交換することを勧めたい。同じ「英語」という教科を教える立場からクラスを見つめてみると、そこには共通点と相違点が必ず見つけられる。つまり英語表現 I の「アウトプット」活動が得意な生徒たちでも、コミュニケーション英語 I の「読解」や「文法」が苦手な生徒たちは見られるし、その反対もしかりである。この時留意したいことは、生徒たちの英語苦手意識を担当者の責任として捉える以前に、その生徒たちの過去の英語学習歴を確認して、その事実に応じた指導内容を建設的に組み立てることだ。この指導法のバランスを担当者間で情報交換して、お互いの役割分担を明確にして生徒指導に臨むと、さらに効果的に英語駆使能力を引き伸ばせるのではないかと考えている。

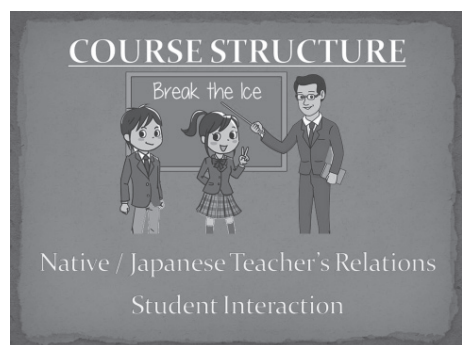
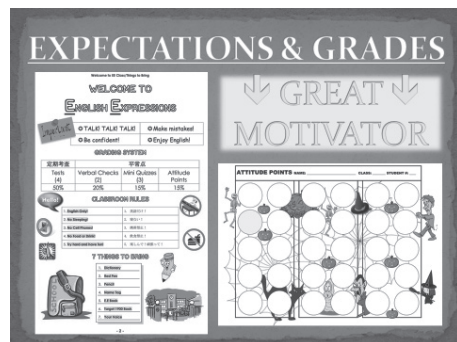
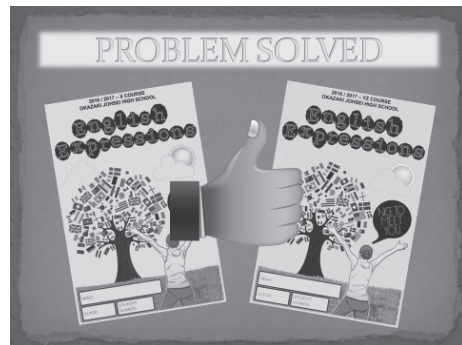
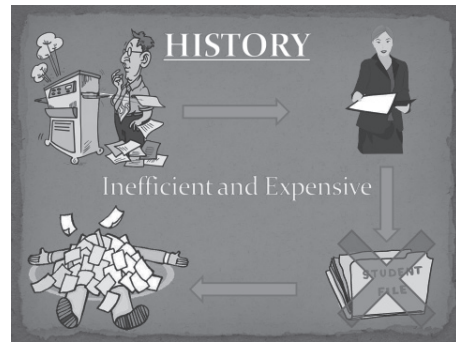
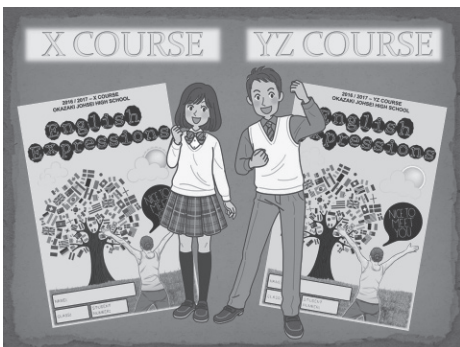
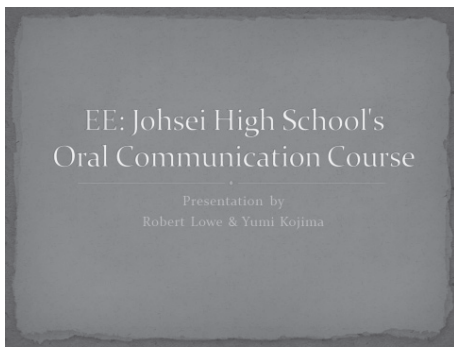
最後に、鳥飼玖美子氏が執筆された中日新聞の記事(鳥飼 2016 年)から考えてみたい。タイトルにもあるように『「使える英語」はまず日本語から』である。鳥飼氏の意見は「基本は読むことで、読めなければ書けないし、聞いて分からないし、話せない、といます。コミュニケーションには、他人と相対する『やりとり』の力も必要で、英語を学ぶ前に言葉を使い、どうやって相手との人間関係を構築するか体験的に知っていると、コミュニケーションが分かってきます。毎日の生活がコミュニケーション習得の場で、それは母語(日本語)から始まります。物事を考える思想の根幹である母語がしっかりあって初めて外国語が理解できるのです。」といます。つまり「子どもが学ぶ上で土台となる日本語を適切に使い、英語を学ぶ方が本当の英語力が育つと思っています。」と語られている。

私たちは洋画を観る時に日本語の字幕を手がかりに内容理解することが少なくない。この学習法は実

はとても効果的なバイリンガル形式の英語学習方法なのではないかと考える。つまり英語を聞き取り、その内容を母国語である日本語でも確認し shadowing という方法で発話して会話力を身に付ける。実際多くの外国人たちが映画を使った英語学習法を推奨している。

英語学習に「日本語を使った学習」を積極的に取り入れていいのだ、と考えたい。Any language is better than another というように「ことば」を使って学んでいることに変わりはないのだ。

「英語表現 I」授業資料



INTERACTION

TARGET VOCABULARY

16 Pages of Vocabulary
240 Words

- 80 Verbs
- 80 Nouns
- 80 Adjectives

Pronunciation & Meaning
Interview Quiz & Games

EVALUATION

CONVERSATION & ROLE PLAY

Create Conversations
Topical Discussions
Give your opinion
Creative Writing
Pair work activities
Presentations

EVALUATION

SEASONAL ACTIVITIES

Summer

Halloween

Christmas

New Year

EIKEN

Test in Practical English Proficiency

- Eiken Passage Comprehension
- Recognize Actions in Pictures
- Answering Techniques
- Interview Test

VIDEO LESSON

From January to March
Good Storyline
Pleasant to Watch
Interesting for Students

EIKEN

Test in Practical English Proficiency

X COURSE

↓

LEVEL 3

YZ COURSE

↓

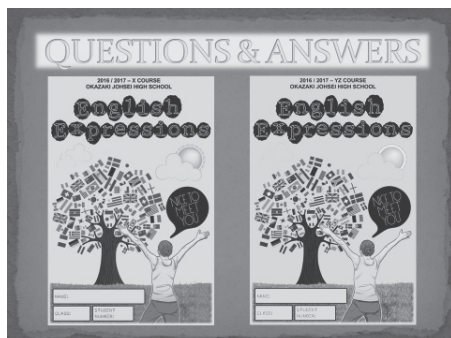
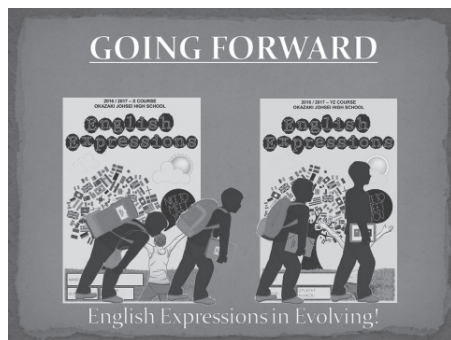
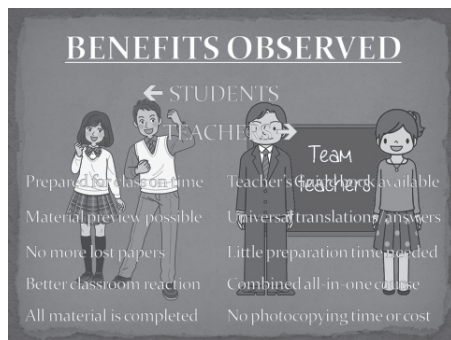
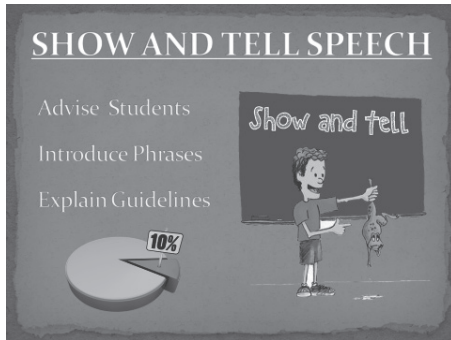
PRE 2

VIDEO LESSON

Played in English Language
Japanese Subtitles

EE Book Activities include...

- Comprehension
- Listening
- Grammar
- Key Words & Phrases
- Conversation



3 台湾 私立高校、国立高校の英語教育 listening / speaking / writing

今夏、昨年度英語部で共同絵画制作活動をしたアートマイルのパートナー校である台湾の台南市にある National Houbi high school (<http://www.hpsh.tnc.edu.tw/?menu=news7>)を訪問した。国立高校で生徒たちの英語力はあまり高くないと伺っている。しかしながらスカイプでやり取りした時の彼らは、指導者のC先生のご指導のもと、英語をととても積極的に使って城西高校の生徒たちとコミュニケーションを図ろうとしていた。その源を探りに昨夏C先生のご自宅に一週間滞在させて頂き、自称「調査研究旅行」で台湾まで出かけた次第である。

昨年度アートマイルに取り組んだ生徒たちは美術コースに所属していると聞いた。一枚のビニールシートのキャンバスを二区分して共同絵画制作をした時も、台湾の生徒たちの絵は城西高校英語部の生徒たちのそれと比較してみるとこだわりが醸し出されていた。聞いてみると、一枚の絵を仕上げるために部長のこだわりで構成を繰り返して練り、何度も描き直したり色を塗り直したりしたそうだ。その絵画制作活動に注がれたエネルギーが、日本の高校生たちとスカイプでも国際交流する姿勢に転換されたようだ。

スカイプで日本の高校生活、食文化や伝統行事などについて様々な質問を投げかけられた。英語部の生徒たちはパソコン画面の向こうに台湾の高校生たちが映っているだけで非日常的な刺激を受け、夢中になって話をしていたが、スカイプの時間が終わると決まって「もっと英語が話せるようになりたい」とため息をつく。

C先生に聞くと、美術コースの生徒たちはそれほど英語ができるわけではなく、スカイプコミュニケーションのやり取りに向けての準備段階でかなり練習を積み重ねて本番を迎えたようだ。つまり、城西高校英語部とスカイプで対面する時には練習した内容を「再現」することに成功していたのだ。「パートナー校とコミュニケーションを図りたい」という目標があるからこそ頑張って練習に取り組み、実践的コミュニケーション能力まで身に付いてしまうのだ。

さて、C先生が台南市にある私立高校で城西高校のような位置付けの高等学校を紹介してくれ、そこでの英語教育も調査する機会に恵まれた。そこで出会ったM先生に以下の質問をさせて頂き、得られた回答を明記したい。

The list of the interview questions

(We recorded 1 hour interview on IC recorder.)

① What kinds of textbooks do you use in classrooms?

(使用している教科書の種類は?)

政府から要求されている英語の教科書は基本的に洋書。補助教材として、学校で作成したオリジナルテキストが使用されている。学校がクリスチャンなのでバイブル学習も取り入れられているほど英語学習に力が注がれている。

② How often do you practice for 4 language skills (reading, writing, listening and speaking?)

(4技能をどのくらい練習しているか?)

毎日英語の授業が一時間あり、gifted class (特進コース) 三クラスでは、設立当初の15年前から英語だけの授業。他の普通コースは英語と中国語のバイリンガル形式の授業。特進コースで英語だけの授業を実施する理由は listening と speaking を強化した 4 skills integrated lessons を取り入れることにより、異文化学習の環境を創り出すことが可能だからだ。

③ How often do you use DVDs or the audio lesson materials?

(映像教材をどれくらい使用しているか?)

主に You Tube から取り入れたものを使うが、ウォームアップとして生徒たちの英語学習に対するモチベーションを高めるため。

④ How many times do you have English lessons in a week?

(1週間に何回英語の授業があるか?)

週に五日間、50分の授業が毎日一時間ずつある。

⑤ What languages do you use in English lessons? Taiwanese or English? Or both?

(英語の授業で使用する言語は? 英語か中国語か? あるいは両方か?)

英語圏の先生が六名いて、特進コース(gifted class)では英語だけの授業を実施。他の普通コースは中国語を使った授業を実施。つまり、American style と Taiwanese style の両方を実施。

⑥ Do you have native English teachers who are from abroad? If so, how many?

⑤を参照。

⑦ Do you have the homestay programs in foreign countries? If so, which country?

(ホームステイプログラムはあるのか? どの国か?)

英語圏へのホームステイプログラムはないが、A F S等の団体を通して海外留学し、また日本に姉妹校があつて年に一回交流している。

⑧ What is the policy of English Education?

(英語教育のこだわりは何か?)

こちらの私立高校では、入試に役立つような実践的コミュニケーション能力を培うことが当面の課題。但し、テストを受けてクラス分けされた26名の選抜クラスではTED TALK (power the right to learn by themselves) スタイルの授業を展開し、topics を what worries me と what excited me のどちらかを選択させ、二分間のプレゼンを実施。自分たちの好きなことや将来に関することをスピーチすることによって、思考が整理され明確になると話されていた。また、原稿を見ないで発表する生徒が多く、発表者を迎え入れる姿勢も聞き手の生徒たちに見られる。

⑨ Anything else. (その他)

M先生が学生時代から英語教育に関心があり、英語教師になることが目標で現在に至っている。

台南市にある英語に力を入れた私立の進学校でも英語だけの授業を目指しつつ中国語で補足説明しながら英語教育を展開している。異国の地、台湾でも母国語を使った基本的な学習スタイルを踏まえて英語教育を展開していると解釈したい。



写真1 台湾の私立高校のTED TALK

4 カピラノ大学留学生の英語部生徒への英語レッスン listening / speaking

今年の四月からU教授の勧めで、隣接する愛知学泉短期大学に來ているカナダの姉妹校カピラノ大学留学生たちから、英語部の生徒たちが英語のレッスンを受けることになった。国際交流委員会の先生方のご指導のもとに四月から六月まで五回のレッスンと二回の準備、そして七月には東海学園高校で開催された愛知サマーセミナーの講座を持つ機会に恵まれた。

カピラノ大学から來ている留学生たちは日本語を学習するために來日している。また英語部の生徒たちは国際交流が可能な環境の中で英語を身に付けることを希望して英語部に所属している。つまりお互いにとって異文化理解の交流の他、積極的に関われば言葉の技術の交換も可能である（Language Exchange）。自分にとって外国語である言葉を使ってコミュニケーションを図ることは、相手を尊重することにもつながる。外国の文化に関心があるからこそ、その国で話されている言葉にも関心を持ち、その言葉の運用能力を磨く。



写真2 カピラノ大学留学生の英語部へのレッスン

この生きた英語を聞く機会に恵まれた生徒たちは五回のレッスンをとても大切に受け止めて参加していた。一回のレッスンは30分であるが、使用言語は全て「英語」であった。英語部の生徒たちは自分たちの伝えたいことを英語で表現するのが難しいと常に話していた。しかし、日本語では伝えたいことはたくさんあるのだ。「伝えたいことがたくさんある」という気持ちを大切に育みたい。つまり、伝達内容が漠然としたものであっても、英語を使って分かりやすく伝える方法を考える過程、言い換えれば英語を使って文章を組み立てていく思考のプロセスが、生徒たちの思考力と同時に言葉の運用力も発達させるのである。

つまり上記のような状況の場合、単に英語でおしゃべりをしていればいいというわけではない。30分という限られた時間の中で、英語部生徒たち10名がお互いに不公平感なく恩恵を受けるような環境作りにより、一人一人のメンバーが有機的に関わることによって貢献しているのである。井下千以子がいうように「自分にとって意味ある知識として再構造化する能力」（井下,2011）が今、学習者には求められているのである。

以下、カピラノ大学の留学生たちが英語部の生徒たちに用意したシラバスである。ここでは主に聞く、話すという言語活動が培われたと考えたい。カナダの文化について英語を使って説明するレッスンは、社会文化的な内容でとてもふさわしいと感じた。また三名の留学生たちの二名が将来教職に就きたいという希望を持っていたので、なおさら意欲的にレッスンに取り組むことができたといえる。

Date	Time	Place	The content of activities
①April 25 (Mon)	16:00-16:30	Junior College, international room	The Meeting with Johsei teacher about the activities
②May 10 (Tue)	16:30-17:00	Junior College, lecture room	The first Meeting and self-introduction of the three exchange students and the 10 Johsei high school students
③May 17 (Tue)	16:30-17:00	Junior College, lecture room	English conversation lesson by Capilano Exchange students I
④June 7 (Tue)	16:30-17:00	Junior College, lecture room	The preparation of Aichi Summer Seminar
⑤June 14 (Tue)	16:30-17:00	Junior College, lecture room	English conversation lesson and Canadian culture lesson by Capilano Exchange students II
⑥June 21 (Tue)	16:30-17:00	Johsei High School	The school guide by Johsei high school students
⑦July 16 (Sat)	9:30-10:50	Tokai Gakuen Senior High School	The presentation of Canadian culture and English conversation lesson by Capilano Exchange students

英語部の生徒たちはこの恩恵に感謝し、その後の英語学習にはずみがついたようだ。実際、評価につながる英語試験等で良い結果が得られたと伺っている。また英語部全員がカピラノ大学の留学生から受けたレッスンについて、大変有意義だと感じていることも言及したい。生きた英語に触れることによって「自分の意見をどのように英語で表現したら良いか」と考えるきっかけを持つことができるからだ。教室の外の「課外活動」で英語を使った自己表現をする機会に恵まれ、そこからは各自の異文化発展学習へとつながっていく。愛知学泉短期大学の国際交流委員会の先生方にも、三か月に及ぶご指導に感謝したい。



写真3 愛知学泉大学・短期大学の岡崎学舎の前で

5 おわりに

英語部「おもいでぐさ」の翻訳活動を始めて writing / reading

今年の六月初旬、岡崎城西高校のY事務長先生から、学校法人安城学園の創立者、寺部だい先生の自伝「おもいでぐさ」の翻訳を英語部で取り組まないかご提案された。10名の生徒たちに相談したら、受験勉強を余儀なくされる5名以外の部員は、思いの外、意欲的に賛同してくれ、夏期休暇中に寺部だい先生の映像をDVDで拝聴し「おもいでぐさ」の本のコピーを配布して読み合わせを始めた。

生徒たちにとっても通学する学園の歴史を辿る意義深い英語学習の始まりである。はじめは手探りで開始した翻訳作動も、回を重ねていくうちに辞書で英単語を調べる習慣が身につく、一回の部活動の時間が90分と長い中、休憩時間を少しだけ持ちながらずっと言葉の学習に向き合った。

生徒レベルでは12月末に翻訳活動は終了した。部活動の中で翻訳した英文はドイツから来ている本

校留学生Kが文法チェックをした。今まで実施した15回の翻訳活動の中で得た生徒たちのコメントは以下のとおりである。

- ・今までこんなに英語を使ったことがない。
- ・英語を勉強したという達成感がある。
- ・留学生の文法チェックがすごい。
- ・翻訳はとても頭を使う作業だ。

一月に入って外国人教師の proof reading& polish が入り3月31日に最終稿を事務局に提出することになっている。今回の「おもいでぐさ」の翻訳活動は単に日本語を英語に直す作業にとどまらない。学校法人安城学園の歴史的事実を学び、その内容にふさわしい言葉の選択を、関わったメンバーで吟味しながら進めていった。この英語学習は生徒たちの思考訓練と結びついたとても深い学習活動になっている。時間も労力もかかるが、取り組んでいる生徒たちからは想定外に前向きな発言を多く受け取っている。たとえ日本語を思うように英語に直すことができなくても、それは「もっと英語学習に取り組まなければ」という前向きな課題に転換されていく。つまり英単語を多く知り、英文を組み立てる技術を身に付けていけば、スムーズに翻訳作業が進行するということを体験の中から学ぶことができたのである。またそれは創立者の自伝を「英語に直す作業に関わる」という姿勢が大きく影響している。創立者の生きざまに触れ合うことによって、人として生きる姿勢も学ぶ。一人の人生を語るのにふさわしい英語表現を皆で知恵や意見を出し合いながら考えていく時、お互いに納得する表現にめぐり合い適切な文章を生み出すことにつながるのだ。生徒たちにとってこの翻訳作業は「善き本に出会えた喜び」と「翻訳体験学習」がリンクされた「創作」英語学習という位置づけだと感じる。また翻訳原稿は「日本語」の本文の下に「英語」の翻訳がセットになった映画の「字幕」のような役割を果たす仕組みになっている。つまり、読んだ英文の意味を日本語で確認しながら読み進めることを目的とした仕組みに仕上がっている。この「バイリンガル形式」の英語学習法が私たち日本人にとって効果的なのではないかと英語部では信じて活動しているからだ。

この活動を20世紀の「新しい英語学習法」と位置付けてみたい。作品が完成したら、そこに至るまでの英語部の活動内容を発表する機会に恵まれますと幸甚です。



写真4 「おもいでぐさ」の翻訳作業

引用文献

井下千以子（2011）「大学における書く力考える力」東信堂
浦田葉子・小島由美（2016）「発表が促すグローバル人材育
成—外国語発表会が培ったもの—」『愛知学泉大学地域社会
デザイン総合研究所』第4号抜刷

Ellis, R.(2000). *Second Language Acquisition*.Oxford:Oxford
University Press.

垣田直巳・沖原勝沼（編）（1991）『英語のライティング』大
修館書店

Cumming,A.(2003)Experienced ESL/EFL Writing Instructor's
Conceptualizations of Their Teaching: Curriculum Options and
Implications.In B.Kroll(Ed.),*Exploring the Dynamics of
Second-Language Writing*.1-27,Cambridge; New York:
Cambridge University Press.

Cumming, A.(1990)Expertise in evaluating second language
compositions,*Language Testing*31-51,[S]Arnold,Page Bros Ltd.

Cumming, A.(1990)Metalinguistic and Ideational Thinking in
Second Language Composing. *Written Communication*,Beverly
Hills:Sage Publications.482-511.

Cumming, A.(1998). Theoretical Perspectives on *Writing*.*Annual
Review of Applied Linguistics 18*,Cambridge: Cambridge
University Press,61-78.

木村博是・木村友保・氏木道人（編）（2010）『リーディング
とライティングの理論と実践』大修館書店

木村友保（2015）「日本人のための英語ライティングセンタ
ー構築の可能性とその実現計画」（平成24-26年度科学研
究費補助金基礎研究（C）研究成果報告書）名古屋外国語
大学 現代国際学部

小林洋子（2000）『チーム・ティーチングにおける「教師
チーム」の問題点とJETプログラム』愛知淑徳大学 異
文化コミュニケーション研究 第3号 抜刷

小林洋子（2001）『「総合的な学習の時間」におけるチーム・

ティーチング「教師チーム」編成と教師の役割』愛知
淑徳大学 異文化コミュニケーション研究 第4号 抜刷
小林洋子・柳善和（2000）『「総合的な学習の時間」における
チーム・ティーチング及び英語教師の役割に関する考察』
名古屋学院大学外国語教育紀要 No.30

鳥飼玖美子（2016）『「使える英語」はまず日本語から』『中
日新聞』（朝）4月25日、9

Ng Bee Chin and Gillian Wigglesworth（2007）
'Bilingualism' An advanced resource book Routledge
Taylor & Francis Group, LONDON AND NEW YORK
Bereiter, C.&Scardamalia, M.(1987).*The psychology of
written composition*.Hillsdale, New Jersey: Lawrence
Erlbaum.

山岸信義・高橋貞雄・鈴木政浩（編）（2010）『英語教育デザ
イン』大修館書店

（原稿受理年月日 2016年12月5日）